



早朝喫茶



川崎ゆきお

「春になると眠くなります」

「春眠暁を覚えずですか」

「日没を待たず、眠くなります」

「私など早く起きてしまい、朝食までの時間が長いので、何をして潰そうかと毎朝思いますよ」

「眠れないのですか」

「いや、満足を得るまで寝ています。しかし、早い」

「早く休まれるためじゃないのですか」

「それもありますが、夕食後すぐに寝るわけじゃない。特に早寝ではないのですよ」

「私は早寝することが多くなりましたなあ。夕食まで起きているのが一杯一杯のときがあります。それで食べると、バタンです」

「しかしここは良いですなあ」

二人は喫茶店の椅子にいる。住宅地の中の奥まった場所で、誰も入り込まないような路地の果て。

「ここを見つけたときは嬉しかったです」

「三時頃開いてますよ」

「そうなんです。卸屋の市場のようにね」

当然、そんな市場は近くにはない。

「朝食にうどんがあるのが良いですなあ」

「私は朝粥定食が好みです」

「私も、一度食べました。付いてくる味噌汁にジャガイモが入っているので、感動しましたよ」

客は他に数組いる。いずれも、早く起きすぎた人達だ。

「しかしこの店、日が出てしばらくすると、閉まるようです。そんな時間までいませんから、よく分かりませんが」

「そうですねえ。何時頃までやっているのでしょうかなあ。お昼は確実に閉まっていますよ」

「まあ、日が出てからは、早く開いている喫茶店が他にもあるから、ここは必要じゃない」

「そうです。三時が二時になれば、もっと良いかもしれませぬえ」

「そうそう。私もたまに二時頃目が覚めることがあります。これはねえ」

「はい、何でしょう」

「休憩なのか、ここが眠りの終点なのかが分からない。紛らわしいタイミングがあります」

「そうですねえ、眠っているとき、何度か起きますよね。その後、まだ眠りが残っていて、大概は寝てしまうのですが、ここが終点ですと、なることもあります」

「それが二時頃に」

「はい、そのまま起きてしまったりします。まあ、滅多にないですが」

「私はたまにあります。二時にもう満足なほど眠ったと思えるどの目覚めでね。しかし、二時だと起きてはまずい。朝まで相当長い」

「暗夜行路ですな」

「白樺派ですよ」

「あれは文体がいい。話は何も起きなくても、活字を追うだけでも楽しい。ああいう小説、もうないのでしょあかなあ」

「物語を追いすぎると駄目なんですよ。あらすじを読んでいるような感じになりますからねえ」

店のマスターは若い人で、夜型の生活をしているらしい。昼間寝ているのだ。昼夜逆転の生活をずっと続けており、それが一向に反転しない。そこで、もう諦めて三時から営業する喫茶店を開いた。資産家の孫だから出来たのだろう。

店は常連さんだけが、流行っている。しっかり需要があるためだ。

噂を聞いて客も増え、朝は常連だけでも満席になる。

それで、増築して席数を増やすことにした。消防法か何かに引っかからないよう、応接室として。

了